

【「宴の器」展によせて】

酒器に託す天への願い

酒の歴史は古く、人の歴史と重なります。「古事記」において素戔嗚尊は八岐大蛇を退治する時に「八塩折酒」を吞ませて酔わせており、また、中国・戦国時代の中山王の墓（河南省平山県）に副葬されていた青銅器の壺の中に入っていた深い青緑色の液体が、二千二百年以上前の醸造酒とされます（図1：河北博物院）。宴には儀式や饗宴、酒盛りなどその規模や形式は様々ですが、飲食を共にすることによって人は神と、または人と繋がり、その関係を深めようとしてきました。

「青磁多嘴壺」（図2：北宋・元豊三年（1080）銘、龍泉窯、高27.0cm、胴径16.0cm、大和文華館）は蓋を欠いていますが、胴の上部に円筒形の管を五本付けた特殊な形の壺で、中国南方の墳墓の副葬品にしばしば見られます。この壺は、胴部が餅を五段に重ねたような形で、各段に蓮弁形の文様が刻まれています。最下段では、蓮弁の中に二～四文字が刻まれ、次のような銘文が記されています。

「元豊三年又九月十五圓日、増添福壽、邕且之進与何十二婆、百年後應益安孫子、富貴長命大吉」
ここでは、「元豊三年九月十五日、福寿を増やし、邕（祭祀に用いるにおい酒）を何十二婆のために供える。百年後においても子孫を安らかに、富貴で長命大吉であること」が願われており、この壺が「何十二婆」の墓に祭祀用の酒を供えるために造られたことがわかります。また、同様の刻銘を持つ「青磁盤口双耳瓶」

（図3：大英博物館）があり、この壺とともに同一墓の副葬品であったことが指摘されています（亀井明徳『大和文華』91号、1994年）。酒を天や神に奉り、死者に供えることは、祖先を敬い、子孫の繁栄へとつなげていく意味を持ちます。

酒はもともと天や神と人をつなぐものであり、中国では酒は天から人に与えられたものという考えがありました。『漢書』食貨志・下の「酒者天之美祿（酒は天の美祿）」の語がこれを端的にあらわしています。ここには、「酒者天之美祿、帝王所以飭養天下、享祀祈福、扶衰養疾。百礼之会、非酒不行。（酒は天の美祿である、帝王が天下を養い、祀って福を祈り、衰弱をたすけて、疾病を養うからである。各種の儀式の集まりも酒がなければ行われぬ。）」と、酒の様々な機能が述べられ、その中には天下の統治も含まれています。このような酒の素晴らしさについて詠われた詩など、酒に関わる詩は多く、酒にまつわる銘文や詩文が記され、刻まれている器も少なくありません。

「青花刻花文字文碗」（図4：高6.3cm、径11.5cm、大和文華館）は、景德鎮民窯で焼造された祥瑞の碗です。柔らかく湾曲した器形で、口縁の少し下に一条の突起が巡らされています。口縁部の内外部及び高台の上部には青花で雷文や菱繫華文、渦卷文、捻花文などの幾何学文が施されています。そして器の外側面の突起線の下部には、酒に関する詩文が刻まれています。

碗の見込みは透明釉がかからず露胎となっていますが、次に記すこの詩文から、この碗は酒を飲む器として用いられたと見られます。

「酒是人間祿、神仙祖代番
三盃和萬事、解切百千愁
乍入新豊市、猶聞旧酒香
抱琴酷一醉、終日俳斜陽
上苑花如錦、中山酒似由
強吞三五盞、解切百千愁
傳得神仙法、開樽滿生香
遙逢明哭主、沈醉又何妨
酒是神仙造、人生免厭他
祭天乞雨頌、亨帝得人和」

酒は人の喜びであり、酒を呑み、酔うことであらゆる憂いから解放される、また酒は神仙が造るものであり、酒を天に供えて祀り、皇帝は人の和を得る、という内容が読まれています。

この詩には、酒の名産地として知られる「新豊」（現在の陝西省臨潼県の西北に漢時代に設置され、唐時代に廃された県名）や美酒としての「中山酒」の語が用いられています。唐時代の長沙窯の水注にも多くの詩や酒に関する美句が記され、その中に「自入新峰（豊）市、唯聞旧酒香、抱琴酷一醉、盡日臥鸞湯（沙場）」といった戦争に関する詩があります。この青花の碗では、この詩の最後の句が替えられています。この他にも、「酒是人間祿」や「三盃和萬事、解切百千愁」など、酒に関して広く知られる詩の文句が複数組み合わされています。ほぼ同じ字句の詩が、同じく祥瑞の幾つもの器に記されていることから、好んで記されていた詩のようです。酒を呑んで心地よく酔い、詩を口ずさんだのでしょうか。この碗は盃より

も大きく、一杯の酒量は多くなりますが、当時庶民が呑んでいた酒は度数が低かったとされることから、三杯で憂いを忘れるくらい酔うには、このくらいの大きさが必要だったのかもかもしれません。

日本の文人や画師でも酒を愛した人々は多く、江戸時代後期には、京都の東山にあった酒樓の「端之寮」（華洛庵、「東山第一楼」とも呼ばれた）は、円山応挙ら文化人が集まる場ともなっていました。「東山第一楼勝会図画帖」は寛政11年（1799）4月6日に近江日野の豪商である中井文寿をもてなすために書画会が開かれた際の書画がまとめられています。その中の一図（図5：部分図、大和文華館）には、まさに書画を揮毫する人々の姿が描かれています。この他に、画僧の月隱による「飲酒図」（表紙図版参照）などもあり、このような場では、景色を楽しみ、酒と肴が嗜まれたことでしょう。江戸時代後期には、既に茶道具として中国明時代末の磁器である古染付や祥瑞など様々な焼き物が入っており、青木木米、奥田穎川らによる中国磁器写しも造られていました。また、オランダの東印度会社によってガラス製のワイングラスなども入ってきています。中国文化や外来文化への関心も高かった文人達の集まりには、趣向を凝らして様々な酒器・食器が用いられたことが想像されます。（瀧朝子）※ 図1は筆者撮影、図3はR.L.Hobson『A catalogue of Chinese pottery and porcelain in the collection of Sir Percival David Bt.F.S.A.』1934年より転載させていただきました。

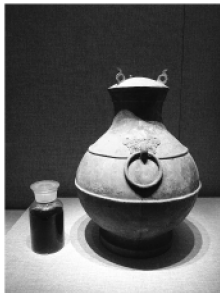


図1 青銅丹壺と酒



図2 青磁多嘴壺



図3 青磁盤口双耳瓶



図4 青花刻花文字文碗



図5 「東山第一楼勝会図画帖」